

田之浦小6年
(志布志市)

登校拒否を考える親・市民の会 内沢 達さん、朋子さん



「同じ場には感傷をもちませんが、いつまでも親を愛する、時がくれば親子で」と語る内沢達さんと朋子さん。

1989年に開設された「登校拒否を考える親・市民の会」は毎月第3日曜日、鹿児島市の鶴岡公園で集まり、登校拒否の経験者や専門家と話をしています。登校拒否する内沢達さん(この日、朋子さん)が、自身が子供の人生を生きることに、子どもへの「親の役割」と語ります。

不登校 親が人生楽しむ姿見せて

「登校拒否」の小中学生は、2021年度に全国で約4万人、県内は約1万人を数える。65歳で専業主婦でした。不登校を経験し、悔しさを吐き出さなければならぬと、友人は聞いてくれました。文部科学省は、不登校を「登校拒否」と定義してはならないと表明しました。登校拒否は悪いものではありません。親は、つちをどう育てるのか、ではなく、つちがすれば子どもも一緒に考えようとするか、を求めています。それはいいのでしょうか。

(2022年月12月10日付)

◆ 家族との信らい関係

ぼくは、新聞を読んで、親は「子どもをどう育てるか」ではなく、「どうすれば子どもと一緒に気持ちよく過ごせるか」を考えると、う所に注目しました。

ぼくは去年、「学校に行くのが辛い」と思う時期がありました。そんな時、父や母は「どうしても無理なら休んでもいいんだよ」と、学校を休ませてくれ、学校へもいろいろと働きかけてくれました。今ぼくが元気に、毎日笑顔で学校に行くことができるのも、辛い時に辛いと言える家族との信らい関係があったからだと思います。お父さん、お母さん、いつもありがとう。

【保護者から】

辛い時に辛いと言つのも勇気のいることだと思っけど、自分の気持ちを引きと伝えてくれてうれしかったよ。これからも、何でも相談したり話し合えたりする関係でいられるといいな、と思います。